

文武両道に優れていた事と、笛の名手が多くて舞台音曲にも優れていた事等で、武骨なところと優雅な一面もありまして、嘉喜踊りの元流である鎌倉踊りを持つてきました。大神楽に至っては笛の名手がたくさん家臣の中にいましたので、都の雅楽より選んできた大神楽の踊りを山田の庄内へ持ち込んだものです。

嘉喜踊りについて、近頃いろいろな説を称へる者があるけれども、断固として私は東氏の一族が伝えたとし、おかしな異説には反対であります。

承平、天慶の乱の時、地の利悪く、道に迷つて危ない時に、日頃信仰する妙見神社に祈願せし処、忽然と童子が出現いたして安全な場所へ誘導してくれました。それ以来、東氏は、以前にも増して妙見神社を信仰致しました。以来 東氏は、東ノ六郎太夫胤頼、重胤、胤行、行氏、時常、氏村、常顕、師氏、益之、氏数、常縁、元胤と常慶、盛数、慶隆、

常友、常久と続きました。この時、常久は、幼君僅か七才で悪臣地田氏に毒殺されてしまい、幕府の命令で東氏、遠藤氏は滅びました。  
しかし、東氏は名門の故をもつて幕府の命令に依り大垣の戸田藩主の男子を東氏の相続人として、近江で一万石の領主を与へられて、現在も東氏を名のつております。

このように、とにかく大神楽も、伊勢神楽も、嘉喜踊りも全部、東氏が関東より持つて来たものです。大神楽も時代の変遷とともに各地によつていろいろつけ加えられたようですが、今後すたれることのないよう祈つて止みません。

加賀太郎にかかわる話  
酒井金一（中津屋）  
中津屋にある「加賀太郎」という地名は、一三五〇年頃、当時住んでいた鷺見氏（鷺見千保（もとやす））が出家して仏心に入り、禪峰・加賀丸論人と名乗り、里人はこれを、鷺見氏の長男故（ゆえ）加賀太郎と呼んだことに由来するものです。  
元来、鷺見氏は、鷺見郷向鷺見（現在の高鷺村）に城を構えておりました。しかし、山田庄の篠脇城主、東氏と戦つて大敗したので東氏の旗下となりました。篠脇城主、東氏は、その一族、鷺見千保（もとやす）を剣村阿千葉城に入城させました。平時、居住する場所は、中津屋村の今でいう「加賀太郎」

というところに館を造営して住まわせました。千保は公儀にも勤め、所領も元通りになりました。しかし、東氏の旗下とはいえ、東氏の自由にもならず相反目していました。

また、千保は、一字を建立して先祖代々の追善供養をしました。里人達は、この寺が阿千葉城の西方に向に当たるので、西御堂と称えました。禪峰（鷺見千保）は幕府からも期待されるほど勇武に優れ、鷺見家代々の中でも特に傑出した武将でした。禪峰没後、鷺見氏は衰え始めました。

天文九年（一五四〇年）八月、越前の浅倉氏が郡上に攻めこんだ時、阿千葉城の鷺見貞保氏は、向小駄良の和田五郎衛門氏と共に東氏に味方せず、傍観的態度をとりました。また、中津屋村坪ノ口に館を構えていた豪族の別府喜四郎も、そして、その配下で前平山に塔を築いていた今井修理兼貞（平時の居住地を現在の尾藤孝一氏宅附近にしていた）も東氏

に非協力的でした。このことにより、東常慶は越前勢を追い出したものの、心中穏やかではなく、先に向小駄良の和田氏を攻略、次に貞保を攻略しようと考えたのです。

翌年天文十年（一五四一年）六月十八日、篠脇城主、東常慶は、阿千葉城の鷺見貞保を攻め滅ぼす目的で兵を招集しました。一方、鷺見氏も兵を集めようとしたが、本領の向鷺見城、鷺見兵庫頭保直は、これに応ぜず兵を出しませんでした。

東氏の一番手には餌取肥後守、二番手には日置主計助、三番手には松井継之助が、剣村にある金剣神社境内に布陣して阿千葉城めがけて攻め上りました。貞保は、鷺見藏人、川尻備中守、森左膳等の勇士を従えて迎え撃ちました。戦況は一進一退の状況で、ついに、夕刻になつて東氏の軍勢は裏山より攻め下り、西方の中津屋方面から池戸内訳、遠藤作右衛門、三木三十郎、加賀主水、土屋修理等の勇士が、手勢

を引き連れて押し寄せました。城方の兵は死にものぐるいで、守備をしていましたが、ついに、守備方森左膳は、城中より槍を提げて打つて出て、日置主水めがけて戦いを挑みました。主水は、左膳の突き出す槍を打ち払い、槍を失った左膳は、すかさず腰の太刀を抜き払つて突撃する。ついには両者組み討ちとなり、両者とも討ち死となつてしましました。川尻備中は餌取肥後守と槍を使って戦いましたが、肥後守の槍が、脇腹を突き破り討ち死にしました。

戦況は、城方の不利になり散々な負け戦になりました。大半は討死するもの、又は、内ヶ谷を通って武儀郡方面へ逃亡するもの、あるいは土着して百姓になるもの等数しれず、哀れな事になりました。貞保は、老家老餌取広綱を招き、幼童七歳の千代丸を連れて落ちのびるよう依頼しました。夜陰にまぎれ、餌取広綱は千代丸を背負い、婦人と数人の侍女と数名の侍達とともに内ヶ谷を越え、武儀郡西牧谷

に落ち延びました。なお、別府喜四郎も今井氏も鷺見氏とともに土地を追われ、飛驒方面へ逃亡しました。貞保は切腹、鷺見藏人が介錯し、藏人も追腹を切りました。

寄せ手の兵士達は城に火を放ち、阿千葉城はついに落城したのです。落城の時は、兵馬もろとも急斜面の山地をなだれを打つて長良川へ落ち、それはそろは悲惨な状況であったとの事でした。

里人はその状況を悲しんで、山腹にお地蔵様を建立して追善供養をしました。いつの頃か、このお地蔵様の首が無くなり、里人は首なし地蔵と呼ぶようになりました。「加賀太郎」にあつた館も寺も兵火に遭い跡形も無くなりました。

長公にお家再興を願い出たので、信長公は八幡城主遠藤盛数に使者をやつて保護させました。盛数は兵助と広綱を郡上へ招き、大島村で五十石を与え大島村地頭、鷺見兵助藤原正保と名乗らせました。

これによつて鷺見家は再興しました。

「加賀太郎」にあつた館も寺も兵火に遭い、當時を偲ぶことはできません。ただ、三基の五輪の塔だけが、今も、昔を物語るかのように寂しく残っています。

阿千葉城から落ち延びた千代丸は、牧谷方面で成人し、名を兵助と改めました。そして、永禄二年（一五五九年）頃、家臣、餌取広綱と共に、織田信

## 下島地名の由来

酒井金一（中津屋）



五輪塔(鷺見太郎左衛門家)……地図4

して城は炎上してしまいました。鷺見氏代々の居住地だった加賀太郎地区の館もお寺も兵火にかかり焼失いたしました。館辺りに居住せし老若男女達も、攻撃軍に追われて館の南方に追いつめられて、高い断崖をころげ落ちて川の中へ沈み、溺死いたしました。

この辺りでは、断崖の事をハバと呼んでおりますので、「おちぜんのハバの悲しい大惨事」といいます。して、この秘話は「悲話」として残つておられます。お寺のあつた所を西御堂と呼び、鷺見氏の先祖代々の墓地である三基の五輪の塔のみ、今尚、残つております。

赤保危の城が落ちた時、鷺見氏の一族

である鷺見太郎左衛門範保は落城とともにいち早く東氏の軍門に降り、許されて東氏の旗下に加わりました。東常慶は討死した兵士達の埋葬と戦場の後片付けと鷺見氏代々の供養を永久にするよう依頼して、その代償として加賀太郎地区七十石を太郎左衛門に与えました。

その後、幾星霜の年月が立ちて、沼田や坪ノ口等の開墾に依りて鷺見太郎左衛門は大地主になりました。中津屋村の押しも押されもせぬ顔役になりました。宝曆騒動の時は、太郎左衛門の当主は村の代表として大いに活躍いたしましたが、残念ながら獄死致しました。明治時代になつてからは、代々の当主は村会議員や区長等を歴任いたして村を背負つて立つ存在でした。

尚、太郎左衛門家の次男坊である太三氏は村山儀右衛門家の世継ぎとなり、区長や村会議員を歴任されました。太三氏の息子、儀一氏も親と同等の道を

曲り淵のカーブで万場側にぶつけた水流は、その反動で中津屋側の庄左エ門さん下方に落ち込んで仮宿淵をつくり、そのまま甚七下の土手下を善助の岸に突進してユウジ川と合流。その勢いで今度、万場側へ流れを変えて万場の助左エ門下へ突入。その反動でまた中津屋側へ、と押し寄せたものです。その湾曲振りは凄く、そのため中央に小島が出来ました。それ故にこの地方を「下島」と称<sup>とな</sup>へました。

私が子供の頃は、その名残りで川の中央に小山ほどもある大きな岩がありました。その岩上より川中に飛び込んで水泳を楽しんだものでした。今はその跡形も無く、川の流れも往時を偲ぶすべもありません。

## おちぜんのハバの惨事とその後

酒井金一（中津屋）

一五四一年六月十八日、赤歩危山上の阿千葉城が

東氏の政略にて落城せし時、城主の鷺見貞保は切腹

今より五百年ほど前、東氏が来郡した時、東氏が引率した一族の中に野田氏というものがあり、阿千葉城が落城せし時鷺見氏に味方して敗北しました。その後、土着して下島辺りに居を構へ、氏も一色を名乗りました。

現在は下島の方に居を移し野田氏を名乗つております。下島にあった墓所も鍛冶屋口に移築して、墓所の跡地だけ残つております。

踏みまして村の顔役でありました。

鷺見太郎左エ門家は、西御堂の五輪の塔のある限り永久に榮えることあります。その理由は、西御堂に祀つてある五輪の塔に、藤原時代よりの祖先代々の厚い強いお守りがあるからです。

※ ①赤歩危……現在は赤保木。

## 剣用水路と高田閥左衛門

瀧 下 浩 〔中津屋〕

郡上八幡城主、遠藤常友は新田開発に意を注ぎ、各地に道路を造り用水路を造成して大いに新田を造

工事で、先ず中央に、北から南へ通する幹線排水路を造り、この大幹線排水路に東西より数多くの小排水路をこしらへて沼の水を抜きました。この大幹線排水路は現在野田小十郎さん宅の東方裏方面にあって、和田川に落水致しております。

尚、剣用水路の開發に依つて、剣村の田の造成は

莫大な面積になり、俗に剣千石と謳われるようになり、又、大島村の田の開墾も、剣村に匹敵するほど面積になりました。

剣用水路の開発によつて、大島村、中津屋村、剣村、の三村は郡内第一の穀倉地帯になりました。偏へに高田閥左衛門さんの努力の賜物と存じます。この他に、美並村の福野新田も同氏の發案によるもので、現にこの新田には、閥左衛門さんの碑が建立されています。末永く同氏の御恩を感謝いたしたく思います。

私共が今日あるのは閥左衛門さんの恩恵によるものであります。新田開発に依つて郡上藩の財政も助成されたこともあつたでしようが、何よりも地域住民の生活も潤つたようです。これからも末永く高田閥左衛門さんの常苦に感謝致したいと思います。

## 桜野新田

東氏が、郡上山田ノ庄へ増加されて越して來た頃、中津屋村の戸数は十七戸ぐらいだったようです。阿千葉城の西北方面に、起伏の多い細長い野原が広がつております。その原野にはたくさんの山桜が繁茂して、春の花盛りにはとてもよい眺めだったらしいです。加賀太郎の館に居住まいしていた鷺見貞保氏は、お城へ登る道路で殊の外、この桜の株を覚えて、この野原を「桜野」と名付けました。

剣用水が出来上がりつてから、この野原は美田に変

成しました。その中で名高いのは、美並村の福野新田と剣用水路です。同用水路は為眞の牛道川下流の長良川に取水口を設けた延々八キロあまりの長い水路です。この水路の設計施工は郡上藩士高田閥左衛門という二百石取りの武士でした。

工事は、堀割り、石積み、土手の造成等々。となかなか難工事でした。その中でもっとも難工事であつたところは、和田川の水路橋と赤保木の堀割りだつたとのことです。次に中津屋に面積約三十町歩程の沼があつて、この沼の水抜きをして田を造成する工事に着手いたしました。この工事は、大変な難工事で、先ず中央に、北から南へ通する幹線排水路

を造り、この大幹線排水路に東西より数多くの小排水路をこしらへて沼の水を抜きました。この大幹線排水路は現在野田小十郎さん宅の東方裏方面にあって、和田川に落水致しております。

## 附記

中津屋の沼は面積が大きいので舟で交通致したらしく、八幡神社へ参詣するのに舟を使つたので同神社のことを「渡すの宮」と称した、との話を私は少年時代に古老より聞きました。沼を干拓して田に造成したので現在は字名も「沼田」と呼ばれております。

27